

## 39. 鎖骨上窩リンパ節から見る癌の転移

医学部2年

石井宏樹, 小林泰知, 鈴木紫穂, 村松瑠紀

【目的】解剖学実習において, 2例のご遺体で左鎖骨上窩リンパ節に腫脹がみられた. そのうち1例では, 左右の鎖骨上窩リンパ節に腫脹がみられた. それぞれの症例について, 原因となる癌の種類, 原発部位, 転移経路の類似点と相違点について興味を持ち, 調査を開始した.

【方法】肉眼的解剖における所見, および臓器より作成した切片のHE染色標本の観察. なお, 1例のご遺体では済生会宇都宮病院より手術時の摘出組織標本をご提供いただいた.

【結果】

・5班のご遺体について

このご遺体の死因は肺癌であり, 肺が原発部位であった. 左右それぞれの鎖骨上窩リンパ節に腫脹がみられた. 肉眼的所見により肺の腫瘍は明確であった. そして, 病理切片を観察したところ, 肺原発の小細胞癌であると同定した.

・29班のご遺体について

このご遺体は, 胆嚢癌のために死去の2年前に胆嚢を摘出しており, 左鎖骨上窩リンパ節が腫脹していた. 生前の病理標本には高分化管状腺癌が認められ, ご遺体のリンパ節と肝臓にも同一形態の癌細胞が存在した.

【考察】

・5班のご遺体の転移経路について

原発巣である肺からリンパ行性に, 胸部リンパ系の正中交差により左右両方の鎖骨上窩リンパ節へ転移したものと考えられたその後, 血行性で肝臓へと転移した.

・29班のご遺体の転移経路について

病歴および細胞の形態から, 原発巣は胆嚢であると考えられる. 胆嚢からリンパ行性により左鎖骨上リンパ節へと転移した. 一方, 肝臓へは直接浸潤または, 左鎖骨上リンパ節からの血行性転移だと考えられた.

【まとめ】2例とも鎖骨上窩リンパ節腫脹を認めた症例であったが, その原因となった癌の種類は全く異なった. また, それぞれ胸部, 腹部の癌である二つの症例で, 両側, 片側のみのリンパ節腫脹となったことは印象的であった. 臨床のバックグラウンドとしての解剖学的知識の重要性を感じさせた.

## 40. 獨協医科大学病院口腔ケア外来の現状と課題

獨協医科大学口腔外科学

柴田裕功, 和久井崇大, 岩村千尋, 土田修史, 大久保真希, 土肥 豊, 麻野和弘, 川又 均, 今井 裕

今回われわれは, 2007年10月から2012年12月までに当院口腔ケア外来を受診した2487例を対象とし, 当院口腔ケア外来の現状と課題について検討を行った.

口腔ケア外来初診患者数は, 開設当初は月間20例前後で推移していたが, 経時的に患者数の増加を認め, 最近では月70例前後の患者が受診していた. 紹介科別患者数は, 第二外科からの依頼が最も多く, 血液腫瘍内科, 第一外科, 呼吸器アレルギー内科と続いた. 依頼内容の内訳は, 周術期口腔ケアが最も多く, 化学療法や放射線療法に関する口腔ケア, ベッドサイドにおける口腔ケア, BMA製剤使用前の口腔ケアと続いた.

口腔ケア依頼時期についてみると, 周術期口腔ケア依頼は947例で, そのうち術前1~5日の依頼が最も多く260例, また手術当日, あるいは術後の依頼は125例みられた. 化学療法, 放射線療法患者に関する口腔ケア依頼は656例で, そのうち化学療法, 放射線療法中に粘膜障害などの口腔内症状が発現してから依頼された例が最も多く274例, 化学療法, 放射線療法前に依頼される場合でも10日以内の依頼が多かった. 骨髄移植患者における口腔ケア依頼は76例で, 移植より1~15日目の依頼が13例, 移植より16~29日目の依頼が17例, 30日以上前が38例であった. しかしながら移植後に口腔内症状を発現したため依頼された症例も8例認めた.

退院後の口腔ケアの実態について検討を行ったところ, 周術期口腔ケアは, 退院後に継続したケアが行われていない症例が多かった. また, 骨髄移植患者やBMA使用前患者およびIEリスク患者の口腔ケアについては, 基本的に当科外来で口腔ケアを行っているが, 口腔内症状がみられない症例では, 退院後の継続的な口腔ケアが施行されていなかった. 症例に応じ一般歯科医院に逆紹介するなど, 医療連携の密なる構築が必要と思われた.